

一遍の教団維持について

岡 本 貞 雄

一遍智真（一二三九—一二八九）上人が、捨聖と尊称され、遊行廻国のうちに一生を終えられたことは、その生涯について記された『一遍聖絵』⁽¹⁾に詳しい。臨終にあたつて

つねに「我（が）化導は一期ばかりぞ」とのたまひしが、所持の書籍等阿弥陀経をよみて手づからやき給（ひ）しかば、伝法に人なくして師とともに滅しぬるかときとかなしくおぼえしに「二代聖教みなつきて南無阿弥陀仏になりはてぬ」との給（ひ）し（巻十一）

「没後の事は我（が）門弟におきては葬礼の儀式をととのふべからず 野にすてふけだものにほどこすべし 但在家のもの結縁のころざしをいたさんをいろいろふにおよばず」（中略）彼（の）五十一年の法林すでにつきて一千余人の弟葉むなしくのこれり（巻十二）

と記されており、一遍が没後の門弟に対して配慮していたことが容易に理解されるし「一千余人の弟葉」があったことが明らかにされている。このことから、一遍が教団の指導者

であり、その維持のために何らかの手段を講じていたことが予想されよう。

時宗教団の発生時期については諸説があり、一遍よりも二祖真教からを教団と呼ぶ方が妥当とする見方もある。『一遍聖絵』には「時宗」の記述はなく「時衆」となっており、現行の時宗教団とは異なる部分があろうが、それは教儀の変遷であり、一遍教団の存在を否定するものではない。臨終の直前には、千人以上の門弟を有しており、その集団を教団と見做すことに問題はなからう。本論では、一遍が教団維持のためにはどのような活動を行ない、それがどのような意義を持つのかについて、一遍教団の時間的経過を基に見ていきたい。

一遍は本来教団形成の意図はなかったとされているほどであるから、その成立時期を確定することは非常な困難を伴う。教団とは宗教活動を行なう集団であるから、そこには当然具備されていなければならない構成要素が存在するはずである。⁽²⁾当然その要素だけで教団成立の十分条件とはいえない

が、少くとも、教義が明らかにされ、信者が存在し、儀礼が行なわれていなければなるまい。一遍がそのような状態に至ったのは、建治三年（一二七六）のことと思われる。教義が明らかにされたのは、文永十一年（一二七四）以前であるが、一遍に随逐する弟子が現れたのは、文永十年、遊行のため故郷伊予を出発して三年目のことであつた。それ以前は

人の供養などもまれなりけり 春の霞あぢはひつきぬれば 無生を念じて永日を消し 夕の雲ころもたえぬれば、慚愧をかきねて寒夜をあかす かくて念仏を勸進し給（ひ）けるに 僧の行（き）あひたりけるが 七条の袈裟のやぶれたるをたてまつりけるを腰にまとひて只縁に随ひ足にまかせてすゝめありき給（ひ）けり（巻四）

という状態で、教団の体はなしていなかったが、ようやく九州で、大友兵庫頭頼泰が帰依し「衣などたてまつりけり其（の）所にしばらく逗留して法門などあひ談じ給（ふ）あひだ 他阿弥陀仏はじめて同行相親の契をむすびたてまつりぬ 惣じて同行七八人相具して」（巻四）遊行を続ける状態になった。これ以後一遍教団は拡大の一途を辿るが、それについて、教団の内外で問題を生じるようになる。その問題解決に一遍がどのように対処していったかを見れば、教団維持がどのように行なわれていたか理解されよう。初期には一遍と時衆の関係は「同行相親」であり、名号の絶対力に救われて

いく修行仲間といったものであつたが、遊行につき従う同行の数が増えてくると、その感覚はしだいに薄れてくる。仲間としての立場だけでは全体を保つことが困難となった時、強調されたのは、一遍のカリスマ性であつた。カリスマ性をもとに、教義については、念仏の絶対性を主張し、集団については統制の強化を行なっている。つまり同行者ではありながら、特異な能力を備えている人物として認め、その指導の下に教団を維持している。一遍自身は表面上はそのような存在であることを認めず、神格化されることを否定しているが、『一遍聖絵』の作者が記す一遍像は、カリスマ性の非常に濃いものである。

『一遍聖絵』が記している、一遍のカリスマ性を感じさせる部分は、約二十ヶ所あるが、教義については、

一、唐橋法印印承 勢至菩薩の化身にておはしますよし霊夢の記をもちてまいれり 聖は「念仏こそ證にてあれ 勢至ならずば信すまじきか」とていましめ給（ふ） 又従三位基長卿ひごろは信じたてまつる思なくて結縁も申さぬところに たちまち瑞夢のつげありとて一巻の記を持参せられたりき 聖「さても信心をこらばよき事よ」とてなげをかれぬ（巻七）

二、正応二年八月九日より七ヶ日 紫雲のたち侍（る）を 其（の）由申（せ）しかば「さては今明は臨終の期にあらざるべし 終焉の時にはかやうの事はゆめ／＼あるまじき事なり」とおほせられしにたがはず其の後はさやうの瑞相もなかりき（中略）聖

一遍の教団維持について（岡 本）

の常の教誡には「ものゝおぼえぬものは天魔心にて変化に心をうつして真の仏法をば信ぜぬなり なにも詮なし たゞ南無阿弥陀仏なり」とぞ侍（り）し まことに彼（の）瑞華も紫雲も出離の詮にはたゞぬ事をあらはして まことの時は見えざりき過去をするも未来をするも 因分の智慧は要なきものにこそ聖（の）歌（に）云（く）

阿弥陀とはまよひさとのみちたえてたゞ名にかよふいき仏なり

南無阿弥陀はとけのみなのおぼえぬいきらばはちすのみとぞなるべき（巻十二）

と、記し、念仏に最高の価値を見だし、一遍のカリスマ性を否定する立場を貫いていることが理解される。この姿勢は、一遍が教団を有することになった時から、臨終まで変ることとはなかった。しかしながら、弟子を指導する場合には、徹底的にカリスマ性が利用されている。

三、弘安六年癸未尾張国甚目寺につき給（ふ）（中略）よりてこの地にして七日の行法をはじめ給（ひ）けるに 供養ちからつきて時僧うれへの色見えければ 聖しめし給はく「断食によりて法命つくることなしかならず宿願をはたすべし」と その夜萱津の宿に侍る徳人二人同時に夢想をかうぶる この本尊のかたはらにまします毗沙門天王かの宿におはしまして 我大事の客人をえたり かならず供養すべきよしをしめし給（ふ）そのあした二人あひともなひて夢想の様を申（し）て供養をのべた

てまつる（巻六）

四、近江国草津と申（す）所におはせし時 中夜をはりて人みなしづまりて後にはかに雷電し雨あらく風はげしかりしに聖おき給へり そのかたはらに侍りしかば「たゞいま結縁のために伊勢大神宮のいらせ給（ふ）に 山王もいらせ給（ふ）なり 不信のものども小神たちに罰せられておほく病悩のものありぬとおぼゆるぞ」と仰（せ）られき 一時ばかりありて雷電とまりぬ 其（の）朝やむものやあるとたづね侍（り）しかば 時衆一度に十三人やみ侍（り）き 又萱津の宿におはしける時も「伊勢大神宮のいらせ給はむずるが蜂にて現ぜさせ給ふべきなり」との給（ひ）けるに 日中はじまりければ道場におほきなる蜂充滿したりけれども 人をさす事もなくて日中はてければみなとびざりにけり（巻七）

五、同八年五月上旬に丹後の久美の浜にて念仏申（し）給（ひ）けるに 龍なみの中より出現したりけり 聖のほかは時衆嘆阿弥陀仏結縁衆たかはたの入道といふもの これを見ると云々それより他所へうつり給（ひ）けるみちにて おきのかたを見給（ひ）て「たゞいまの龍の供養をなさむとするぞ 供養には水を用（ふ）る事也 たゞぬれよ」との給（ひ）ければやがて雨ふり雷なりて人みなぬれにけり 又同年但馬国のくみといふ所にて海より一町あまりのきて道場をつくりたりけるに おきのかたより電のするを見給（ひ）て 龍王の結縁にきたるぞとの給（ひ）て日中をはじめ給（ふ）に風雨雷電しなみあらくしほさして道場にみちいる 行道しけるひとものほどまでひた

りにけり 道具とりのけなどしければ 聖制してみなぬれ／＼行動す 行法おはりければ塩もとのごとくになりぬ 年来しほのいる事もなき所なれば人あやしむ事かぎりなし (巻八)

六、又天王寺にして歳末の別時をはじめ給 (ふ) 凡 (そ) 別行

の時は時衆の過現の業報を知見し 信心の浅深をかゞみ給 (ふ) 事侍 (り) き 過去の事は人しらずといへども今生のしわざすこしもたがふ事侍らず かゞりしほどに聖いかゞ思 (ひ) 給 (ひ) けん かやうのことその詮なしとてその別時よりは無言にて行じ給 (ひ) けり しかるに丹波 (の) 国に山内入道と申 (す) もの (中略) かさねて靈夢ありければ聖のもとに参 (り) て帰依したてまつり いまは弓箭等を帶すまじよし申 (し) てつねに随逐したてまつりしがこの別時に参りたりけるに 聖の給はく「いまはかやうの事はいはねども いかに入道は兵具を身にしたがふまじよし申 (し) ながら又もつぞ」との給 (ふ) 入道「さること候はず」と申 (し) けるに まさしくさるうつば し／＼の弓と手鉾と化現せり「いかに」と仰 (せ) られるとき 当座に懺悔して「下人等があなづり候あひだ方便にもちて候也」と申 (し) て さるうつばと弓と手はことをとりいでてやきすてつ 刀のありけるをばなを大切に思 (ひ) てかくしてもちたるに 又聖の給 (は) く「四寸ばかりなる刀をもちたるをばなどかくすぞ 不当の入道かな たゞいま地獄におちなむず」と教誡し給 (ひ) ければ なく／＼とりたいだしておりすてゝけり (巻九)

以上の引用からみて、明らかに一遍はカリスマ性をもって

一遍の教団維持について (岡 本)

時衆を指導していたことが理解される。組織的な場合も個人的な場合もあるが、カリスマ性が最も発揮された時期は、一遍が鎌倉から京都へ遊行し畿内地域を遊行した時期である。⁽⁴⁾

この時期は教団が世間に認められ、弟子や信者が急増した時期であり、集団維持のため、その指導にカリスマ性を利用したものと思われる。しかしながら、引用六に見られるように、別行の時は時衆の過去現在の行いとその報いを見通し、信心の浅深を指摘していたのを無意味なこととしてとりやめるに至っており、このことは、弟子達が一遍のカリスマ性によって指導されるレベルを越えてきたことを意味しているのではなからうか、急成長期には必要であったものが、安定期に入れば、それに代る指導方法が要求されているのである。以後も、予言のような形でカリスマ性が出てくるが、それによって弟子を指導することではなく、代って用いられたのが、戒であったと思われる。『一遍聖絵』には出ていないが、『一遍上人語録』上巻と『奉納縁起記』には、一遍が四天王寺に参詣した時に作ったとされる『時衆制誡』が出ており、一遍の真作であるかどうか疑問の余地はあるものの、一遍の教団維持の方向性は示されていると思う。さらに、弘安十年 (二二七八) 三月一日には遊行生活に必要な最少限の持ち物である十二道具について、種類とそれぞれの持つ意味を文章化しており、⁽⁵⁾ 教団維持のために、成文化が進んでいることをうかがわ

せる。このことは、時衆が教義と共に体制についても確固としたものになってきたことを示すものといえよう。ここに時衆が、一遍没後においても存続し得た理由を見い出すことができるのである。しかしながら一遍はさらに、所持する書籍等を焼き「一代聖教みなつきて南無阿弥陀仏になりはてぬ」と宣言することによって、教義としての念仏思想の徹底を画し、カリスマとしての一遍から弟子達を脱却せしめる行動に出た。時衆はあくまでも念仏に依るものであつて、その念仏には一遍という人物までも包含されてしまうことを弟子に伝え教団を後世に託したのである。世上、一遍は教団を残す意思はなかつたとされるが、没後の教団がどのようになっているかは、一遍の意思とは無関係ではない。弟子達がどのような行動に出るか予測できないのではなく、二祖真教が遊行上人を嗣いだのも、一遍の教団が維持されていた結果であり、このことは、一遍の生前に十分予測していたことであつたと思われる。本論では、一遍教団を時宗教団とあえて分離してその維持について論を進めたが、以上により、一遍教団は時宗教団であると言い得る。

- 1 本文引用の『一遍聖絵』は全て浅山圓祥校註『一遍聖絵六条縁起』山喜房により引用文の後に巻数を示した。
- 2 今井雅晴著『時宗成立史の研究』吉川弘文館、二一九頁参照
- 3 一遍の教義の確立については諸説あり、確定されておらず、

最も遅い説による。

4 弘安五年から九年の間であり『一遍聖絵』の巻五から巻九に記されている。

5 『一遍聖絵』巻十「十二道具持文」

〈キーワード〉 一遍、時衆、教団

（広島経済大学助教授）

新刊紹介

金子芳夫・小山一行・羽矢辰夫 校註

新国訳大藏經 インド撰述部 阿含部三

長阿含経三 尸迦羅越六方礼経 他

A5版・三八二頁・定価九、八〇〇円
大蔵出版・平成七年三月